

親の well-being に関する理論的検討

—— IDD のある子どもを育てる親の well-being 概念の
検討に向けた予備的考察——

勝 浦 眞 仁

A Theoretical Examination of Parent's Well-being

—Preliminary Discussion for Examining the Concept of Parent's Well-being
Raising Children with IDD—

Mahito KATSUURA

プロローグ—IDDのある幼児を育てる両親の語りから生まれた問い—

知的障碍⁽¹⁾および／または発達障碍(Intellectual and Developmental Disorder, 以下 IDD とする)のある子どもの保育を、その子の親はどのように受け止めているのだろうか。この素朴な問いを契機として、IDDのある幼児を育てる両親に、その子の保育場面における日常的なエピソードを提示し、その印象を率直に語ってもらうことを試みた。その結果、否定的ではなく肯定的に我が子らしい姿を見出していこうとする生き方の裏側にある揺れ動く親の心性—「障碍児の親」であり、「この子の親」であるという両面—を見出すことができたとともに、子ども園等の就学前施設に「我が子がいる意味」を実感することで支えられる親のありようが明らかになった(勝浦, 2020a; 2020b)。その支えとなる実感の背景には、園にいる他児や保護者の存在、園の配慮といった保育環境が大きく影響を与えていることも見出された。

上記の研究は、ある両親の語りから導いたものであり、今後もインタビューを重ねていくことで、IDDのある子どもをもつ親の生きるありようをより理論として精緻化していくことが、筆者にとって大きな課題となっている。よって、更なる親の語りの分析に取り組みたいところではあるのだが、引っ掛かりのとれないところが1つ残っている。それはIDDのある子どもをもつ親にとって、「障碍児の親」であり、「この子の親」であることが、自身の生にどのような変容をもたらしていくのかという問いである。

そのように考えさせられるきっかけとなった、筆者にとって印象深い語りを以下に示す。語りは、勝浦(2020b)より引用したが、本稿における考察は、前稿とは違う切り口からの考察になっている。協力者はIDDのあるソラ(仮名)の両親で、ソラが6歳のときの語りである。なお、語りを分かりやすく提示するため、括弧をつけて文意を補うなどの修正をしたところもある。

インタビュー事例：父の変化についての受け止め（年長クラス10月）

(1) 園長の話：一番育ったのは僕かもしれない

園長とソラの父との話の中で、「園での暮らしで一番育ったのは僕かもしれない」と父がボソッとつぶやいたことを園長から聞いた。ソラが園で生活することを通して、父はどのようなところが「育った」と感じたのであろうか。

(2) 語り：父の「育った」面への受け止め（下線部は筆者による。後の考察に対応している）

筆者：園長先生とのお話の中で、一番育ったのは僕かもしれないっておっしゃったって。

母：そんなこと言ったの。ええー。いいこと言うね。

父：子どもとかかわるってことは、ソラが生まれる前とかは、そんなにないっていうか、どっちかっていうと苦手。

筆者：そうだったんですか。

父：どう接していいかっていうのが。たぶん身構えていたところがあったのが、変わってきたっていうのはありますか。

筆者：身構えていたっていうのは。

父：子どもに対して苦手だになっていうか。ソラとかかわって、それプラス、ここで、他の子たちも、ソラくんを通じてかかわってくれるので。父兄参加で1日来たときに、ソラとかかわりたいのに、他の子たちがわらわらと来て。その子たちとずっとそのまま（遊んだ）。ソラが生まれる前はそういうことはあまりできなかった。

筆者：園で過ごすことで。

母：他の子と比べなくなったね。ソラの中の過去としか比べなくなったかもしれん。やっぱ気になるしき。字書けない、数字数えられないとかあるけど、そういうことじゃなくて、ソラの去年と比べるようになったかな。

父：前はソラを、他の子たちにどんだけ近づけるかっていう考えで、療育やったりとかっていうのがあったんですけど。ここ来て、そうじゃないんだなって。先生たちのかかわり方とか見たりとかして、ソラくん自身を見ていくっていうようになってきた感じはしますね。どうしても比較ばかりして①。

母：そう。本当比べてたもん②。

父：今でもやっぱり多少あることはありますけど。もちろんね。例えばどっかのお父さんと子ども、こうやって遊んでることがこっちはできないってことが、いっぱいあったりするんですけど。そういうときはできたらいいなって思うことはあるんですけど。やっぱり、その子とソラを比べるっていうわけではなくてきた感じはしますね③。

筆者：ソラくんの成長として見ていこうと。

母：じゃないとやってけんしね。本音もらすと。私たちが生きてけん④。

勝浦（2020b）より引用

(3) 考察：IDDのある子どもを育てる親の well-being を問う必要性がある

母親の「私たちが生きてけん」という語り(④)は、筆者自身の心にどこか突き刺さるものがあった。父に向けられていたのか、母自身に向けられていたのかは分からなかったが、その前の「本当比べてたもん」という母の語り(②)にも、両親がソラを育ててきた裏側に様々な葛藤を経験してきたことを感じさせた。父親についても、ソラが生まれる前は子どもとかわった経験はあまりなく、また、ソラが生まれた後も、他の子どもの発達に追いつくことを目指す考えの下、ソラを育ててきたところがあった。しかし、園での生活の中でソラ以外の子どもとかわり、また先生のかかわりを見ているうちに、他児とソラとを比べることがなくなってきたと言う(①、③)。他児と全く比較しなくなったわけではなく、様々な思いを持ってしまうときもあるようだったが、ソラ自身を見ていく姿勢へと変化していった。この語りのみでは言い切れないところもあるが、先の論考に示した他のエピソードや語りも合わせて考察した結果、『園に「我が子がいる意味」を親が実感できる支えがあることによって、他児との比較ではなく我が子の育ちを捉えようとする、「この子の親」ならではの親の心性が醸成されていく』(p. 176)と結論付けた。

IDDに限らず、障害のある子どもの親研究の文脈においては、①障害受容過程を中心に、親が経験する心理過程に関するもの、②親が抱えるストレスや不安に焦点を当て、その支援に関するものの2つのテーマが大きな方向性として挙げられる(高岡, 2013; 大東・前川・中村, 2009)。これらの多くは、親が「障害児の親」として、子どもに障害のあることを受容し、その状態に適応していくことに焦点化したアプローチであったと言える。

この文脈からこの語りを検討していくとすれば、ソラの両親がソラにIDDがあることを受容しているかどうか、ソラがいることのストレスや不安に対して対処できているのかどうかを問うことになるのかもしれない。さらに、障害をすでに受容した親と捉えた上で、この語りを解釈する立場もあるかもしれない。

しかしながら、語りの端々に「障害児の親」と「この子の親」という両面で揺れ動く心性の垣間見られることから、もうすでに障害を受容し、ストレスや不安への対処を身に付けている親というわけでは全くない。また、これらを問うこと自体、IDDのある子どもをもつ親を「障害児の親」という一面でしか捉えられていないといわざるを得ない。むしろ重要なのは、揺れ動く心性を抱える障害のある子どもをもつ親が、「この子の親」であるという心性を醸成させていく中で、親としての生き方やあり方をどのように問い直していくのかである。これを問うことによってこそ、IDDのある子どもをもつ親に対する深い理解につながっていくと考える。

ソラの両親の場合であれば、ソラを周囲の子どもの発達と比較し、周囲に追いつくことで園や集団に適応することによる成長を目指していこうとするのではなく、これまでのソラとの比較を通して、いまのソラの成長を見ていこうとする両親の生き方の転換があった。これは、障害のある子どもをもつ親が持つべきものとしてではなく、ソラと共に生きていこうとする中で備わってきたものと考えられる。ただし、この転換によってソラに対する子育てすべてが前向きに捉えられるという単純なものではなく、揺れ動きながら進んでいくことには留意されたい。

ここまで示してきた観点に限らず、IDDのある子どもを育てる親は、我が子の障害とされる否定的な面ばかりに目を向けているのではなく、我が子の姿そのものに肯定的な眼差しを向けている面もあるとされる (Kearney & Griffin, 2001; 柳楽・吉田・内山, 2004)。それゆえ、IDDのある子どもをもつ親ならではの迷いが子育ての中で生じるのであり、我が子と共に暮らしていく上で生じる問題をいかに乗り越えていくのかに心を砕いている親の葛藤があることがいわれる (Larson, 1998; 沼田, 2018)。

このような、親の両面ある心性や肯定的および否定的情動、心理的欲求の充実、有意味感などの子育てに対する実感を包容した概念として、親の well-being がある (Nelson et al., 2014)。子育てに関連して、親の well-being を探る研究はこれまで様々に行われてきたものの、IDDのある子どもをもつ親の well-being に関する具体的な様相はほとんど検討されてきていない。

IDDのある子どもをもつ親の well-being の実態に迫るためには、IDD児との直接的なかわりのみならず、親自身のメンタル状態や働く職場の状況、家庭の経済的状況、夫婦関係等の家族の状況、保育の場や地域社会の理解、宗教・文化の影響など、ミクロな視点からマクロな視点まで、実に様々なレベルで相互に関連する環境からの影響を考慮していかなくてはならない。このような、多様で連関性のある環境から、肯定および否定的情動や有意味感といった子育てに対する実感が生まれ、IDDのある子どもを育てる両親の well-being が形成されていくと考えられる。よって、IDDのある子どもを育てる両親の子育てに対する実感を明らかにしていくことには、両親の well-being を高めるために必要となる子育て環境を見出していくという社会的意義があると考えられる。

以上、ここまで述べてきたように、IDDのある子どもをもつ親の well-being を探究していくことは重要であり、最終的にはそこを目指した研究を模索している。その予備的考察として、親の well-being という概念自体をそもそもどのように考えていけばよいのかを理論的に検討することを本稿の目的とした。まずは、これまでの well-being の概念を概観し、批判的に検討することから論を始めていくこととする。

I well-being 概念の批判的検討

1 well-being とは

well-being が最初に取り上げられたのは、1946年の世界保健機構 (WHO) 憲章前文における健康の定義であったと考えられる。その原文と翻訳を以下に示す⁽²⁾。下線部は筆者による。

Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.

健康とは、病気ではないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあることをいいます。

この翻訳からは、well-being は「状態」であることが示唆され、満たされている状態であることからポジティブな面を含んでいると考えられる。また、状態であるから、高まることもあれば低下することもあると考えられ、静的なものではなく、動的なものとして捉えられる。well-being に対しては、福祉や幸福、健康、安寧など様々な訳語が当てられており、決定版はないものの、それらすべてを包括した肯定的なニュアンスのある概念といえよう（金井，2015）。

ただし、WHO 憲章の翻訳にある「すべてが満たされた状態」をどのように理解するかは難しい。生涯発達の観点から考えれば、高齢になるにともなって身体的には衰えていくが、周囲からの社会的なサポートを受け、精神的には前向きに生活している人もいるだろう。また、若者の中には身体的には問題ない状態でありながらも、ひきこもりなど精神的・社会的に苦しい思いをしている人もいるだろう。人の一生を考えれば、先の定義のような健康の状態に常にある人はほほいないと考えられる。それでは、世の中に健康な人がいないのかと問われれば、先の3要素すべてでよい状態を満たしているわけではないが、前向きに生活しているという人はいると思われる。ポジティブな面のみならず、ネガティブな面も含めて考えていくことが必要であろう。その中で、トータルに考えると良好な現状、ほどよい状態にあると人が感じられるときに well-being な状態にあると考えられる。類似した考え方として生物—心理—社会モデル⁽³⁾があり、3つの視点が有機的に絡み合いながら、1人の人を全体として理解していくことが求められているように（富田，2017）、well-being においても包括的に状態を捉えていくことが求められているといえよう。

2 well-being 研究の現状—個に閉じた well-being —

このように well-being 自体が包括的な概念のために、その切り口はこれまで様々なものがあつた。その代表的なものとして、幸せや喜び、高揚、誇り、恍惚などの幸福感研究をレビューし、well-being の心理的な要因について強調したものが Dinner (1984) の subjective well-being (以下、SWB とする) であり、心理学分野でのネガティブ感情への過剰な傾倒への反応として発展してきた。Dinner et al. (1999) によれば、SWB には、認知的側面と感情的側面の2つの領域があり、認知的側面は、(i)「全体的な生活満足度」に関することであり、感情的側面には、喜びといった (ii)「人生に対する肯定的情緒」、および、悲しみといった (iii)「人生に対する否定的情緒」の両面が含まれると述べている。つまり、(i) から (iii) の3つの要素を SWB の構造として示した。これらに関連して、Busseri & Sadava (2011) は、(i) から (iii) および well-being との関連性を5つのタイプにモデル化し、その構造を検討している。ただし、いまだモデル自体は合意に至っておらず、その確定にはまだ程遠い状況であるとされる。このように SWB 研究においては、well-being に関連する3つの要素が見出されたとともに、well-being 自体が1つの要素のみでは論じることができず、それぞれに連関性のある複雑な構造をしていることが見出されてきたといえる。

(i) でよく挙げられる具体例としては、金銭的経済的状況に関するものがあろう。子どもの相対的貧困という言葉が昨今よく見られるが、「全体的な生活満足度」が金銭的経済的状況と

関連しているという考え方は一見分かりやすい。ただその内実としては様々な言説があり、高収入は人生の満足度とある程度関連している一方で、低収入は低い人生の評価と低い感情的幸福の両方に関連するというものや、平均所得がある程度以上の高い国々では、所得の高低が well-being に与える影響はそれほど高くないというものなどが述べられてきたところではある (アニーシャ・鈎, 2020)。その他にも、文化的差異や、就労や結婚、育児や介護等の生活環境などが、「全体的な生活満足度」に影響を与えるとされる。

このように well-being を検討していく上では、それぞれの人の生活状況をおさえておくことは1つの要件である。しかし、これがすべてではなく、肯定的情緒と否定的情緒といった感情的側面の両面から検討していく必要性を述べたことが、SWB 研究の意義のあるところと考えられる。本稿で検討しようとしている親の well-being についても、子どもが生まれることによって、親となる人には身体的にも精神的にも劇的な変化が生まれ、これまでの生活における優先順位が一変する (Nelson et al., 2014)。そこで親が様々な精神状態を抱えてしまうことは想像に難くない。ワーク・ライフ・コンフリクトに見られるような、子育てに対して親がアンビバレントな感情をもつことはある意味、自然なことではないかと思われる。それは親の well-being にも大きく影響してくることであろう。

このように肯定的および否定的情緒の両面から well-being を検討していくことは、親の well-being において必要な観点であるし、プロローグにおいて示したように、IDD のある子どもを育てる親の揺れ動く心性の中に垣間見られたところではある。この揺れ動く心性は、ソラと父親、ソラと母親、および、父親と母親との関係の中でこそ生まれてきたものであり、我が子に対する肯定的な面と否定的な面とがアンビバレントの状態を抱えながらも、それらを統合して「我が子らしさ」を見ていこうとする面が親にはある (柳楽・吉田・内山, 2004)。

しかしながら、SWB 研究においては、その人自身が抱える肯定面情緒と否定面情緒の両面はおさえていながらも、その両面ある感情を抱えながら、どのように周囲の人たちとの関係性を取り持っていこうとしているのか、その機微が見えてこないところに、現状の well-being 研究の課題があるのではないだろうか。もちろん、well-being は今の状態のみを反映したのではなく、Dodge et al. (2012) が well-being について、「蓄積された個人の能力と直面する挑戦との均衡点 (the balance point between an individual's resource pool and the challenged faced)」と述べているように、その人の人生経験を含みこんだものになっているとは考えられる。しかし、それらすべてを包括した個に閉じたものとして well-being を捉えることが前提となっており、人と人との関係の中で形成されてきた well-being が十分に捉えられているとは言い難い。

その証左として、SWB 研究に限らず、well-being 研究においては質問紙法が一般的であり、その内実を検討しようとした質的研究がほとんど皆無であると言ってよい。well-being の尺度および尺度作成の課題が、これまでの well-being 研究において大きなウエイトを占めていたといえよう。1つ1つの well-being の尺度について論じることは、本稿の目的から外れていってしまうため行わないが、それぞれの研究においては、そもそも well-being とは何かから検討し、それに沿った尺度や要因を作成することに終始しているように思われる。そもそも well-being

は尺度のみでしか捉えられないものなのであろうか。個に閉じた well-being 概念を軸とする限り、質問紙法による尺度測定が中心になるであろう。しかし、現状の well-being 研究においては、人の生きる有り様に十分に迫り切れているとは考えにくい。

一方で、人と人との関係に言及している well-being 研究がないわけではない。Seligman(2012) は、flourish という概念を用いて、well-being の多面的モデルを提起した。ここで flourish とは、持続的幸福感と訳されるものであり、人間が持続的に心理的に幸せを感じる状態をいう。この状態は 5 つの領域が関係しているとされ、PERMA モデルが提唱されている。5 つの領域とは、P (Positive emotion, ポジティブ感情)、E (Engagement, 物事への積極的な関わり)、R (Relationship, 他者とのよい関係)、M (Meaning, 人生の意味や意義の自覚)、および、A (Accomplishment, 達成感) である。また、これについての心理尺度も作成されている。

この Seligman の理論については、持続的に幸せを感じるという指摘があり、well-being を点ではなく、時間軸の中で捉えていることが重要であると考えられる。その上で、関係という面への言及はたしかにあるものの、他者との「よい関係」が目指されたものであり、ここまで述べてきた肯定的および否定的情緒のアンビバレントと統合の観点からすれば、「よい関係」という側面は一面に過ぎない。また、そもそも関係は well-being を構成するものの 1 つなのかどうかについても、検討が必要であろう。というのも、本稿で検討する親の well-being を検討するとき、子どもが生まれた時点で親と子という関係性はすでにあるものであり、むしろそれを根幹に据えた議論になっていくからである。友人関係など、人と人との出会いによる関係を考える場合は、議論の前提が違ふことが考えられ、そもそも人と人とのどういった関係に焦点を当てていくのかを検討していく必要がある。翻って考えれば、そういった関係の焦点の見えづらさがあるというところに、これまでの well-being 研究同様、個に閉じた well-being 概念に位置づけられると考えられる。

3 well-being は個に閉じたものなのか—関係性に開かれた well-being 概念に向けて—

ここまで、個に閉じた well-being が well-being 研究の大部分を占めていることを議論し、それについて批判的に検討をしてきた。一方で、本当に個に閉じたものなのかどうかを考えたときに、個人にとっての well-being のみならず、社会にとっての well-being を捉えていこうとする、ソーシャル・ウェルビーイング (金井, 2015) という考え方もある。それは特に経済学において議論されてきた。

社会にとっての well-being とは、ある社会の「よさ」を評価する何らかの基準ないし政策目標として理解されてきたとされる。例えば、GDP (国内総生産) といった指標が挙げられる。その一方で、社会にとっての well-being を評価するために最も重要な情報的基盤は、その社会を構成する一人ひとりの個人の境遇、つまり個人にとっての well-being であったことも指摘されている。

Graham (2011) によれば、個人にとっての well-being として議論されてきたのは、1 つはヘドニズム (hedonism)、もう 1 つはエウダイモニック (eudaimonism) と呼ばれるものである。前者の well-being とは、「最大多数の人々にとっての満足と喜びを最大化すること」であり、

個人にとっての well-being が社会における well-being につながっていくという考えである。気分や感情に相当するものであり、生活上の出来事に対する瞬間的な評価を表すものを表す。その一方で、後者の well-being とは、「より広義の人生の評価という意味では、『目的があり、意義深い人生を送る機会』として考え」とされる。より理性的かつ内省的な、自らの生き方に対する姿勢に着目している。背景にはアリストテレスの倫理学があり、何かのための手段ではなく、その行為自体が究極の目的としてすべての行為を動機づけるところに幸福があるという考えである。また、前者のみならず後者についても、心理尺度を用いた質問紙法も用いられてつある（榊原・石井・久保田河本，2019）。

具体例として Graham は、「不幸な成長のパラドックス」を挙げている。ある社会が急速な経済発展を遂げる際に、発展当初はそれ以前に比べて一時的に人びとの幸福感が下がるという現象が起こるとされる。その理由としては、目標水準を高く設定したが現実がまだそれに追いついていないことが考えられ、エウダイモニック的な well-being は満たされるものの、ヘドニズム的な well-being が満たされていないとされる。

このように、well-being が個に閉じているとは限らず、社会に開かれているという考え方がないわけではない。しかし、最終的には個人としての well-being に回収されてしまう、もしくは社会の well-being そのものがないという考えに辿り着いてしまう（金井，2015）。個に閉じた well-being という概念を乗り越えていくことは、なかなか難しいことが分かる。

well-being 概念を批判的に検討してきたが、そもそも well-being という考え方自体は大変幅広く、学問領域が多様であり、研究者それぞれで定義も異なってしまうところがあり、本稿ですべてを網羅することはできていない。不十分な点があることは率直に認めながらも、しかし、well-being は人と人との関係を根幹に据えて検討していくべきものであるにもかかわらず、個に閉じた well-being 研究に終始している感が否めない。

少なくとも、親の well-being を考えていく上では、親と子という関係性がすでにあり、そこで営まれるやりとりで生まれる肯定的および否定的情緒のアンバランスと統合の観点から見ていく必要がある。また、その背景にあるその人の置かれた状況や、well-being を時間軸の中で捉える必要性、また誰と誰との間で生まれる well-being なのか、どういった関係の中での well-being なのかにも目を向けていくことによってこそ、well-being の形成されていく過程を掴むことができるのではないだろうか。

well-being 研究において、個に閉じた well-being 概念を超えていくことはなかなか難しい壁かもしれないが、関係の中で形成される well-being を検討していくことによってこそ、人の生きる実態や内面に迫ることができると思う。以上の観点を踏まえて、親の well-being 研究について、次に検討していくこととする。

II 親の well-being 概念に関する検討

次に、これまでの親の well-being に関する理論を概観する。SWB 研究で述べてきたように、「全

体的な生活満足度」に関する認知的側面に関することと、「人生に対する肯定的情緒」および「人生に対する否定的情緒」といった感情的側面に関することとの2つに関する理論を概観することとした。まず、前者の理論から取り上げる。

1 全体的な生活満足度の観点から

ドイツ日本研究所の“Parental Well-being: Japan and Germany in Comparison”によれば⁽⁴⁾、ドイツと日本における親の well-being の諸相と構造を明らかにすることを目的とした質問紙調査が行われていた。その中で、親の well-being に関して7つの特定領域の well-being があることが指摘されている。それをモデル化したものが図1である。翻訳は筆者によるもので、中心を取り囲む各要素のそれぞれの状態が親の well-being に影響していることを表したものである。それぞれが相互に排他的であるというよりも累積的であり、親の well-being を包括的に検討する必要性が述べられている（真鍋，2015）。

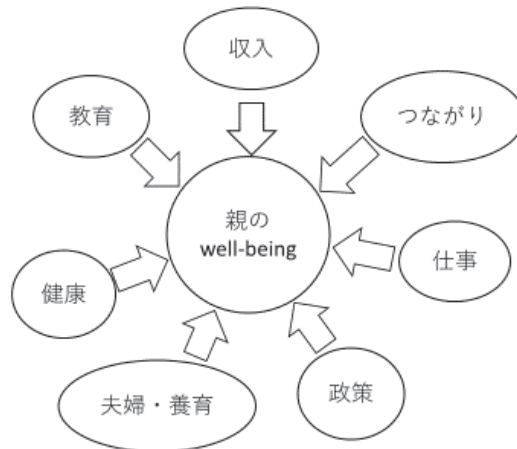


図1 親の well-being のモデル図（ドイツ日本研究所⁽⁴⁾を参照し、筆者が翻訳および改編）

図1は、親の well-being が客観的な生活状況と連動し、相互に影響することを示したものである。また、親の well-being が子どもの発達にも影響を与えることが指摘されている。図1の領域として挙げられているのは、上から反時計回りに(1)親の収入・物質面の豊かさ（貧しさ）、(2)学歴等の親の教育状況と子どもに対する教育的願望、(3)親の健康状態とパーソナリティ、(4)夫婦関係の満足感、(5)子育て支援の政策によるサポート、(6)就労および仕事の満足感、(7)社会とのつながり、の7つである。親の well-being には、収入や仕事の満足度などの認知的側面のみならず、夫婦のパートナーシップや社会とのつながり、サポートなど情緒的な側面も取り上げられているが、これら全体的な満足度が、親の well-being に影響を与えていることが示唆されていることから、認知的側面としてこの図を取り上げた。

日本とドイツとの国際比較も行われており、親の日常生活諸領域における満足度や生活全般を通しての満足度・幸福感はドイツの方が日本より高いことが明らかになっている（真鍋，2015）。また、日本においては、夫婦のパートナーシップへの満足度が高いと、それ以外の満

足度も高くなる一方で、ドイツにおいては、夫婦のパートナーシップへの満足度が高いからといって、それ以外の満足度も高くなるということはないことも示されている。

また、図1で示された well-being の構造は、6歳未満の乳幼児をもつ親を対象として想定されたものであるが、Iで述べてきたように、一般的な人々の well-being においても同様に当てはまるのが指摘されている。筆者は最終的には、IDDのある子どもを育てる親の well-being を明らかにしていくことを目指しているが、well-being 自体が対象を限定する必要があるのかどうかについては検討を要する。しかし、IDDのある子どもを育てることには、定型発達児の子育てに比べて、様々な困難のあることがこれまで言われてきており、well-being も低いという指摘もされている (Hastings, 2016 ; Beighton & Wills, 2017)。よって、IDDのある子どもを育てる親独自の要素について、検討していく必要性はあると考えられるが、これは今後の課題としたい。

また、親の well-being でありながら、子どもとの関係性が見えてこないところはこれまで述べてきたように well-being 研究における課題と考えられる。子どもの well-being や育ちへの影響はたしかに示唆されているものの、その関係性を根幹においた議論とは言えない。これについても、今後検討していくこととする。

2 人生に対する肯定的および否定的情緒の観点から

次に、親であることが親の well-being に与える影響を検討した Nelson et al. (2014) の理論について検討していく。Nelson et al. は親の well-being について図2のようにモデル化を試みており (翻訳は筆者による)、well-being の定義として、Busseri & Sadava (2011) をもとにして、肯定的および否定的情動が well-being 全体を予期するものであるとしているため、感情的側面として本稿で取り上げることとした。

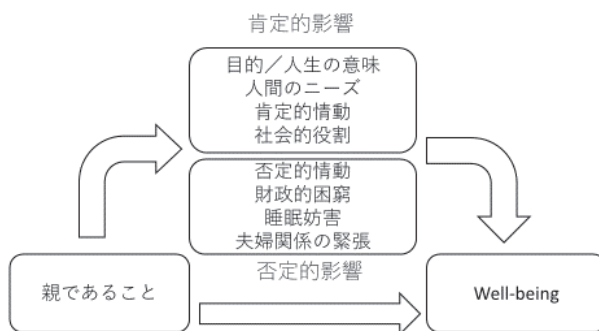


図2 親の well-being のモデル図 (Nelson et al. (2014) を参照し、筆者が翻訳作成)

親であること (parenthood) が親の well-being に与える肯定的な影響として、生きる目的や人生における意味を見出せることや、人間のニーズを満たすものであること、肯定的な情動および社会的な役割が与えられることによるものが挙げられており、負の影響として、否定的な情動が生まれることや、財政的困窮が生じること、睡眠が妨げられること、また夫婦関係の緊張が生まれうることが指摘されている。親であることの肯定的側面と否定的側面とが相互に影響

響をし合いながら、親の well-being が形成されていくという点でこの図は理解がしやすいものである。一方で、肯定面と否定面との間でどのように折り合いをつけていくのかという面については言及されておらず、課題として残されているところではないかと考えられる。

このモデルは基本的には情緒的側面を検討したものであったが、認知的側面についても言及されており、図2の背景となる要因について以下を挙げている。まず、その生活状況に関しては、親の年齢や子どもの年齢、両親の性別、夫婦関係、収入等の財政的状态、就労状態、家族の構造、居住環境、文化が挙げられる。また、心理的側面としては、周囲からのソーシャルサポート、養育スタイル、障害等の子どもの問題、子どもの気質、両親の愛着スタイルが挙げられている。また、ある特定の状況下においては、親の well-being が高まることも指摘されている。

これらは概ねⅡ-1で述べてきたところと類似しているが、親や子どもの年齢も well-being を形成する要因であるという指摘のあることから、時間軸に沿って親の well-being がどのように変容していくのか、また同様に、子の well-being や親子としての well-being がどのように変容していくのかを検討していく必要があると考えられる。

また、心理的側面として養育スタイルや愛着についての言及が見られることが Nelson et al. (2014) の指摘において重要である。これらの背景には、親と子との関係性が生まれていることから、親子が一体としての well-being が形成されていくところが視野に入ってくると考えられる。実際、育児に関する感情により well-being が高まったり、低下したりする可能性も示唆されていることから(熊野, 2017)、親と子との関係の中で営まれるやりとりを通して、どのような育児感情が生じてくるのか、特に肯定的感情と否定的感情とのアンビバレンスという議論で終わらせることなく、その両価的な感情をいかに統合していくのかというところを検討していく意義はあるといえよう(大澤, 2020)。

Ⅲ 予備的考察としてのここまでのまとめ

1 関係を根幹においた親の well-being を検討する意義

本稿では、well-being 研究について概観し、批判的検討をする中で、関係を根幹においた well-being 概念を検討していく必要性を述べてきた。親の well-being についても検討してきたが、様々に諸理論があり、今後も議論を重ねていくことが必要な領域である。まだまだ十分に検討できていない点も残るが、本稿では、これまでの well-being 研究の流れに基づいて、親の well-being 研究に関する認知的側面と感情的側面とで代表的な理論をそれぞれ1つずつ検討した。

これまでの親の well-being 研究も、従来の well-being 研究同様に、個に閉じた well-being 概念が研究の中心を占めていたことは否めない。しかし、子がいるからこそその親であり、親子という関係を根幹においた well-being 概念へと転換していく必要があると考える。親の well-being を規定する要因の1つとしての親子関係という枠組み自体を問い直していく必要があるのではないだろうか。

この親子関係を根幹においた well-being 概念を検討する意義として、親の well-being が子の

well-being に影響する、また逆に子の well-being が親の well-being に影響を与えるということがある。親の well-being 研究において示した両理論とも、親の well-being は短期的であれ、長期的であれ、子の well-being や育ちに影響を与えることが指摘されており、そこに親の well-being を検討する意義があると考えられる。

例えば、筆者が父親として子どもとかかわってきた場面を振り返ってみると、ハイハイをしていた我が子が1歳くらいになって立ち上がり、ふらつきながらも歩いていこうとするとき、その姿に我が子の成長を筆者自身は感じ、まるで自身のことかのように喜び、我が子を励ましたり、ほめようとしたりする。またその親の喜びに触発されて、子どもも笑顔になったり、もっと歩いていこうとしたりする姿が生まれてくることなどが思い出される。また、筆者が専門家チーム等で観察してきた学校現場の子どもたちの中には、授業場面で落ち着きのない子どもとして取り上げられながらも、その困り感の背景を検討していけば、親にその子自身をもっと見てほしいという気持ちの表れであることもあった。Nelson et al. (2014) は幸せの状態から検討していたが、逆に、親の well-being が充実しないときには、子の well-being にも負の影響が表れ、またその育ちにも様々な影響が出てくることが推察される。

それは、IDD のある子どもを育てる親についても同様にいえることであろうし、プロローグで見たように、揺れ動く両面の心性を抱えている親を支えていく上でも、well-being を高めていく支援を模索していく意義がある。よって、親の well-being を検討していく上では、その生活状況を把握していくことに加えて、親と子それぞれの well-being が、お互いに様々な影響を与えていくことから、関係を根幹において親子が一体となった well-being 概念を視野に入れていく必要がある。

この観点は、これまでの先行研究においてほとんど取り扱われてきていない。特に、親と子とのやり取りの中で生じる様々な育児感情に着目していく必要があり、そこには肯定的情緒のみならず否定的情緒も含まれ、それらがアンビバレントな感情として均衡する面がありつつも、子どもとのやり取りの中で、その両価的感情に折り合いをつけ、統合されたときに、親と子との間で共有されるほどよい情緒が生まれてくると考えられる。そのときには、親のみならず子どもにとっても、well-being が高まっていく状態が考えられる。アンビバレントと統合、緊張と共有という両価的な情動が含まれ、またそこからほどよい関係が生まれてきたときに親と子が一体となった well-being が形成されていく。これらから、親の well-being を「親であることの安寧感」とひとまず定義し、この観点から親の well-being 研究および IDD のある子どもを育てる親の well-being 研究を今後展開していくことを目指す。

2 今後の課題— IDD 児の親の well-being の検討に向けて—

ここまで親の well-being について、IDD のある子どもを育てる親の well-being を探究するための予備的考察として本稿では論を進めてきた。現状においても、IDD のある子どもを育てる親の well-being を検討する必要性が指摘されつつある (Hastings, 2016; Minnes et al., 2015)。先に述べたように、IDD のある子どもを育てる親の well-being は定型発達とされる子どもを育てる親と比べて低いとされており、その要因を探る研究がなされている。

具体的には、発達障害のある子どもたちの親の SWB を高める要因を特定し、親の人生における希望を見出すことによって、障害の影響による親の well-being の低下を和らげることができるとする論考や (Golan, 2016)、IDD のある子どもを育てる夫婦関係の質は、現在の親の well-being につながり、共に養育をする質は未来の well-being につながることを示し、IDD のある子どもに対する臨床的な介入において、夫婦関係の要因は配慮に入れるべきであることを明らかにした論考もある (Norlin, 2012)。

しかし、この領域はまだ十分に研究がなされているわけではない。また、従来の well-being 概念で導かれていたようなモデル化もまだなされていない。さらに、関係を根幹においた IDD のある子どもとその親との well-being に着目していたわけでもない。このため、現在の研究においては、従来と同様、質問紙による研究ばかりで、インタビュー等の質的研究がなされているわけではない。しかし、IDD のある幼児を育てることに対する親の実感に深く迫っていくためには、プロローグで示したような質的な研究を行っていくことが不可欠なのではないだろうか。特に、IDD のある子どもとその子の親とのやり取りを通して生まれる子どもの姿の意味づけから子育ての実感が生まれ、IDD のある子どもを育てる親の well-being が形成されていくと考えられる。このような観点から、IDD のある子どもを育てる親の well-being とは何かについて探究し、そこから親を支える支援のあり方について検討していくことを今後の課題とする。

注

- (1) 本稿において、しょうがいとは「障害」と表記することとする。生得的な障害が発達を妨げる石になっているという字の成り立ちが、発達障害をよりよく表していると考えるところによる (勝浦, 2016)。
- (2) 日本 WHO 協会の翻訳を参照した (<https://japan-who.or.jp/about/who-what/charter/>; アクセス日、2021年1月5日)。
- (3) 生物—心理—社会モデルとは、生物システムと心理システムと社会システムが入れ子状の関係にあると理解するモデルである。英語では、Bio-Psycho-Social Model と言われ、頭文字をとって、BPS モデルともいわれる。
- (4) ドイツ日本研究所 (DIJ) の “Parental Well-being: Japan and Germany in Comparison” を参照した (<https://www.dijtokyo.org/ja/project/parental-well-being-japan-and-germany-in-comparison/>; アクセス日、2021年1月4日)。

引用文献

- アニーシャ ニシャート (2020) well-being 研究に関する展望と課題. 創価大学教育学論集, 72, 179–193.
- Beightson, C. & Wills, J. (2017) Are parents identifying positive aspects to parenting their child with an intellectual disability or are they just coping? A qualitative exploration. *Journal of Intellectual Disabilities*, 21(4), 325–345.
- Busseri, M. A. & Sadava, S. W. (2011) A review of the Tripartite Structure of Subjective Well-Being: Implications for Conceptualization, Operationalization, Analysis, and Synthesis. *Personality and Social*

- Psychology Review*, 15(3), 290-314.
- 大東万紗子・前川あさ美・中村菜々子 (2009) 障害をもつ子どもの親の心理過程と必要な支援との関連—6名の母親への面接調査から—。発達心理臨床研究, 15, 49-63.
- Dinner, ED. (1984) Subjective Well-Being. *Psychological Bulletin*, 95(3), 542-575.
- Dinner, ED., Suh, E. M. Lucas, R. E. & Smith, H. L. (1999) Subjective Well-Being: Three Decades of Progress. *Psychological Bulletin*, 125(2), 276-302.
- Dodge, R., Daly, A. P., Huyton, J. & Sanders, L. D. (2012) The challenge of defining wellbeing. *International Journal of Wellbeing*, 2(3), 222-235.
- Graham, C. (2011) *The Pursuit of Happiness: An Economy of Well-Being*. Brookings Institution Press.
- Hastings, R. P. (2016) Do children with Intellectual and Developmental Disabilities have a negative impact on other family members? The case for rejecting a negative narrative. In Hodapp, R. M. & Fidler, D. J. (Ed) *International review of research in Developmental Disabilities: Fifty years of research in intellectual and developmental disabilities*, 50. USA, Academic Press.
- Golan, V. S. (2016) The subjective well-being of parents of children with Developmental Disabilities: The role of hope as predictor and fosterer of well-being. *Journal of Social Work in Disability & Rehabilitation*, 15, 77-95.
- 金井雅之 (2015) ソーシャル・ウェルビーイング研究の課題。ソーシャル・ウェルビーイング研究論集, 1, 7-22.
- 勝浦真仁 (2016) “共にある”ことを目指す特別支援教育 関係論から発達障害を問い直す, ナカニシヤ出版。
- 勝浦真仁 (2020a) Column 5 発達障害のある子どもを育てるということ。川島大輔・松本学・徳田治子・保坂裕子 (編) 多様な人生のかたち: 迫る発達心理学, ナカニシヤ出版, 38.
- 勝浦真仁 (2020b) 障害のある子どもをもつ親の揺れ動く心性を探る—園のエピソードを両親と語ることを通して—, 保育学研究第58巻第2・3合併号, 167-178.
- Kearney, P. & Griffin, T. (2001) Between joy and sorrow: being a parent of a child with developmental disability. *Journal of Advanced Nursing*, 34(5), 582-592.
- 熊野道子 (2017) 乳幼児をもつ親の育児感情と自分の役割配分と幸福感の関連. *Journal of Health Psychology Research*, 29(2), 45-52.
- Larson, E. (1998). Reframing the meaning of disability to families: the embrace of paradox. *Social Science and Medicine*, 47(7), 865-875.
- 真鍋一史 (2015) 親の生活満足度と幸福感の諸相とその構造—日本とドイツの比較データ分析. 青山総合文化政策学, 10, 50-93.
- Minnes, P., Perry, A. & Weiss, J. A. (2015) Predictors of distress and well-being in parents of young children with developmental delays and disabilities: the importance of parent perceptions. *Journal of Intellectual Disability Research*, 59(6), 551-560.
- Nelson, S. K., Kushlev, K. & Lyubomirsky, S. (2014) The pains and pleasures of parenting: When, why, and how is parenthood associated with more or less well-being? *Psychological Bulletin*, 140(3), 846-895.
- Norlin, D. & Broberg, M. (2013) Parents of children with and without intellectual disability: couple relationship and individual well-being. *Journal of Intellectual Disability Research*, 57(6), 552-566.
- 沼田あや子 (2018) 発達障害児を育てる母親の迷いの語りの探求—他者は母親のなにに寄り添うことができるのか—. 心理科学, 39(2), 44-57.
- 大澤直樹 (2020) 発達心理学における育児感情研究への家族社会学的視点の導入—歩行開始期の親の育児感情と母親/父親の動機づけの差異の解明に向けて—, 京都大学大学院教育学研究科紀要, 66, 83-96.

- 榊原良太・石井悠・久保田河本愛子（2019）日本語版エウダイモニック・ウェルビーイング尺度の作成. 日本心理学会第83回大会発表論文集, 385.
- Seligman, M. E. P. (2012) *Flourish: A visionary new understanding of happiness and well-being*. Free Press.
- 高岡忍（2013）自閉症の子どもを持つ母親に関する文献的検討：当事者としての筆者の自閉症子育て体験の視点から. 人間文化研究科年報, 28, 133-144.
- 富田拓（2017）非行と反抗がおさえられない子どもたち—生物・心理・社会モデルから見る素行症・反抗挑発症の子へのアプローチ—. 合同出版.
- 柳楽明子・吉田友子・内山登紀夫（2004）アスペルガー症候群の子どもを持つ母親の障害認識に伴う感情体験—「障害」として対応しつつ, 「この子らしさ」を尊重すること—. 児童青年精神医学とその近接領域, 45(4), 380-392.

（受理日 2021年1月7日）